

研究者の関わる共創

—大学院大学における事例の報告—

Co-creation involving researchers

-Report on Activities at the Graduate University-

加藤晶太¹, 佐藤航¹, 萩原礼奈¹, 越前屋俵太², 西村拓一¹

Akihiro Kato¹, Wataru Sato¹, Reina Hagiwara¹, Echizenya Hyota², Takuichi Nishimura¹

¹ 北陸先端科学技術大学院大学

1 Japan Advanced Institute of Science and Technology

² 北陸先端科学技術大学院大学 未来創造イノベーション推進本部

2 Japan Advanced Institute of Science and Technology Headquarters for Promotion of Future Innovation

Abstract:

Co-creation is being discussed with the aim of creating new value. Graduate universities are also working on co-creation opportunities. If it is necessary to consider co-creation for different purposes and by different stakeholders, it is significant to introduce examples of co-creation and activities to promote co-creation. It is worthwhile to introduce examples of co-creation and activities to promote co-creation. In this paper, we introduce the following case studies of co-creation, which are mainly conducted by researchers. This paper describes the activities of three organizations in Japan Advanced Institute of Science and Technology, and examples of co-creation in each of them. Specifically, the following activities are described. The activities of “JAIST Dance Club,” which promotes the co-creation of embodied knowledge by researchers and citizens, and the “Labora.try advanced science and technology research club”, which promotes co-creation in different fields by researchers and researchers. “NOMIST, an SNS transmission unit in collaboration with City Hall,” which promotes co-creation between researchers and City Hall.

1. 背景

新たな価値の創出を目指すため、企業、官公庁、大学など、様々な組織で共創が取り沙汰されている。大学院大学においても例外ではない。修士課程の学生を含む研究者が新たな発想を創出することを期待し、大学は共創の場づくりに力を入れている。

堀田の定義に倣えば、共創とは「背景が異なる人々が、共通の目的の達成や課題の解決のために、共に創作活動を実施すること」^[1]であり、様々な背景の人々との共創が考えられる。例えば、地域課題に関する研究を行う上では、市民との共創がある。ここでの共創は、研究者が市民の視点を取り入れることで、地域課題の背景を正確に捉え、適切なアプローチを考えることで生じると考えられる^[2]。

この例は、「地域課題の解決」という目的、「研究者および市民」というステークホルダーによって生じる共創である。目的やステークホルダーごとに共創の生じ方が異

なるとする。そのとき、それぞれの組織に適した共創の場づくりが必要であり、共創の事例を共有することに意義があると考ええる。

本稿は、研究者を取り巻く共創の場づくりの事例として、北陸先端科学技術大学院大学(以下、本学)における3つの組織での活動を述べ、それぞれにおける共創の事例を示す。次章では、研究者と市民による身体知を共創する事例として、「JAIST ダンスクラブ」での活動を紹介する。3章では、研究者と研究者による異分野共創の事例として、「先端科学技術研究クラブらぼらとらい」での活動を紹介する。4章では、研究者と市役所による共創の事例として、「市役所連携 SNS 発信ユニット NOMIST」の活動を紹介する。5章では、3つの活動を踏まえたまとめを述べる。

2. 身体知の共創

2.1 概要

はじめに、身体知と身体知の共創について定義する。身体知とは、「訓練によって身体が覚えた高度な技」^[3]のことである。例えば、サッカーや野球といったスポーツや伝統舞踊、介護業務など、多種多様な分野における身体知が存在する。

身体知の共創は、身体と言語^[4]、あるいは身体と環境^[5]が相互作用し、1つの系として身体知を体得すると説明されるように、単独における身体知の体得を意味することが多い。これに対し、本稿では、他者と他者が相互作用し、各個人が身体知を体得することを身体知の共創と考える。本章では、身体知の共創を実践する研究サークルの取り組みを紹介する。

2.2 JAIST ダンスクラブにおける活動

2022年6月に身体知の共創と持続的な地域活性化を目指し、「JAIST ダンスクラブ」を立ち上げた^[6]。これは社交ダンスを中心に、ヒップホップ、バレエ、少林寺拳法などの様々なスポーツの基礎的な動きをダンスとして楽しみ、地域住民と共に健康増進を実践する地域活性化のための活動である。

本活動の特徴を図1に示す。参加者は、自分の得意な動き、やってみたい動きを持ち寄り、他の参加者と共に動きを実践する。スポーツ経歴の違う参加者が、様々なスポーツの動きを実践することで、これまで経験してなかった新しい身体の使い方を学ぶ。もしくは、それらの動きの共通点に気づき、身体知の要件を理解する。

本活動において、研究者と市民と一緒にダンスを楽しむ、体の動かし方を追求する活動のなかで、身体知の共創が生まれた。例えば、社交ダンスのワルツとランジワーク、社交ダンスとバレエの立ち方における共通点への気づきがある。この気づきは、動作を他者に言語で教示し、対話をするなかで生じたものである。また、参加者の1人は、本活動への参加によって、テニスの腕前が上達したと述べている。また、別の参加者は、体幹が安定し、姿勢が良くなったと述べている。

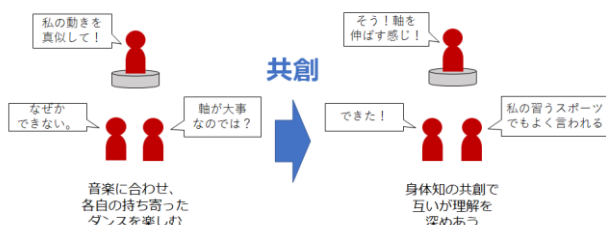


図1: JAIST ダンスクラブにおける活動

3. 研究者による異分野共創

3.1 概要

様々な分野の研究者が各々の専門性を活かし、創造的なアイデアを創発することを目的として、異分野共創に注目が集まっている。

本学は10個の研究領域で構成されており、様々な分野の研究者が在籍している。本章では、これらの研究者による異分野共創を促す研究クラブの取り組みを紹介する。

3.2 「先端科学技術研究クラブらぼらとらい」における活動

本学では、様々な分野の研究者が共創することは疎か、対話することも少ない。これらの研究者が集まって対話し、異分野共創を促す場をつくるため、「先端科学技術研究クラブらぼらとらい」が設立された。表1にこれまでの活動実績を示す。

表1: これまでの活動実績

回	日付	開催議題	内容
1	2023/06/08	ダイエット	議題に関する共創
2	2023/06/22	星座 視線計測	議題に関する共創
3	2023/07/02	街歩き	地域の課題探し
4	2023/09/01	合宿	研究の ブレインストーミング

第1回と第2回の活動は、図2の実践プロセスのもとで行った。はじめに、開催議題に関する学習を行う。学習は、開催議題に関係する研究者の発表や実験器具の試用を踏まえて行われる。次に、開催議題に関する学習を踏まえ、約30分間の議論を数個のグループに分けて行う。議論を踏まえ、各グループは研究アイデアのプレゼンを行う。図2中のイラストは、第1回の共創によって創出した研究アイデアである。



図2: 異分野共創のプロセス

以上のプロセスのもと、研究者間での対話と異分野共創を促すことができたが、実践には至らなかった。一因として、研究者が自身らの共創によって生み出した研究アイデアに対して、自己とは無縁のものと認識していることが考えられる。そこで、第3回と第4回では、研究者が研究アイデアを自分事として捉えるための活動づくりを実践した。

第3回では、研究者自身が地域課題を発見することで、自分事としての研究アイデアを共創できると考え、2つのチームでの街歩き企画を実施した。ところが、各チームが地域課題を発見し、研究アイデアを共創するには至らなかった。地域課題に対する研究の共創に関しては、市民共創知研究会^[2]のように、研究者と市民間における共創を促すことが有効と考えられる。

第4回では、研究者が数個のグループに分かれ、約30分間、自由な議題のもとで研究のブレインストーミングを実施した。ところが、議論を通じて提案された研究アイデアはいずれも個人に帰属するもので、共創を促すには至らなかった。共創の創出にあたり、開催議題を決め、参加者に共通課題を持たせた上で共創を促すことが重要と考えられる。反面、ここで生じた研究アイデアの実践が進行中であり、研究者が研究アイデアを自分事として捉え、実践するためには効果的であったといえる。

4. 市役所との共創

4.1 概要

東京一極集中に伴う地方人口の減少は、社会問題として広く知られている。総務省は「地方から東京圏への流出が加速しており、特に若者流出が激しい」^[6]と指摘している。地方は、在住する若者に対して地域の魅力を発信し、若者の流出を防ぐ必要がある。それと同時に、東京圏に住む若者に地域の魅力を発信し、若者の地方移住を進めることも重要である。

若者への発信には、SNSが有効であると考えられる。総務省が20代から60代を対象に行った調査によると、SNSの利用状況は20代で最も多く、58.1%がSNSを積極的に活用していることが読み取れる^[7]。また、SNSであれば地方から東京圏に住む若者への発信が可能である。本章では、市役所と大学が連携し、若者視点で地域の魅力をSNS発信するユニットでの取り組みを紹介する。また、取り組みのなかで生じた研究者と市役所間における共創の事例を報告する。

4.2 「市役所連携SNS発信ユニットNOMIST」における活動

「市役所連携SNS発信ユニットNOMIST」は、2020年に石川県能美市役所と本学が始動した企画である。写真・動画共有SNSサービスInstagramを用いて、若者目線で能美市の魅力発信を行うことを目的に立ち上げられた^[8]。活動開始から3年が経ち、フォロワーは500人

に到達しつつある。メンバーは公募で決まり、1年ごとの任期制となっている。

本活動はこれまで、能美市の特産品や観光名所、地域のイベントの発信を行ってきた。本年度は、新たな形式での発信が生まれつつある。例えば、リール動画(15秒から90秒の短尺動画)形式やストーリー(投稿後24時間経過すると消えるコンテンツ)形式での発信や、シリーズものとしてのコンテンツ発信である。また、スタンプ機能やチャット機能を用いた双方向型コミュニケーションにも取り組み始めている。

本学の研究を発信する企画も始まった。本学では若者の興味をひき、いわゆる「バズる」可能性のある研究が行われている。実際、2023年9月にイグ・ノーベル賞を受賞した明治大学の宮下教授も本学の卒業生である。現在、研究発信により注目を集め、従来発信で能美市の魅力を伝える新たな発信のかたちが、研究者と市役所の間で共創されつつある。

5. まとめ

本稿は、共創を日常的に促す活動づくりとして、本学における活動と共創の事例を報告した。表2に各活動における共創の目的、ステークホルダー、実施形態をまとめた。各活動における今後の展望を示す。

「JAISTダンスクラブ」は発足から1年になる。これまで、対面とオンラインのハイブリッド開催による活動に始まり、普段の活動や地域イベントへの積極的な参加で地域活性化に貢献してきた。今後も、さらなる身体知の共創と持続的な地域活性化を継続していく予定である。

「先端科学技術研究クラブらぼらとらい」においては、様々な研究者が対話をし、異分野共創を促す場づくりに成功した。今後は、共創の実践までを見据えた活動デザインを行っていく予定である。

「市役所連携SNS発信ユニットNOMIST」では、市役所との共創および実践を継続する。将来的には、双方向型の研究発信を推進し、能美市人口の増加にむけた能美市とSNS閲覧者のトラスト形成を進めていきたいと考えている。

謝辞

本研究の一部は、国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)の委託業務(JPNP18002)の結果得られたものです。また、本研究の一部は、ムーンショット型研究開発事業(JST)JPMJMS2237の支援を受けたものです。最後に、本活動にご協力頂いた「JAISTダンスクラブ」、「先端科学技術研究クラブらぼらとらい」、「NOMIST」の関係者に感謝いたします。

参考文献

- [1]. 堀田 竜士, 三井 実, 伊藤 孝行, 白松 俊, 藤田 桂英, 福田 直樹 : 研究者と市民の共創を生み出す研究会の提案, 人工知能学会論文誌, vol. 34, No. 4, p. 1-8, (2019)
- [2]. 白松 俊, 伊藤 孝行, 福田 直樹, 堀田 竜士, 三井 実, 藤田 桂英, 市民共創知研究会 (CCI) : 地域課題に立ち向かう知を AI 研究者と市民が共創する場, 人工知能学会研究会資料, vol. 34, No. 5, p. 616-621, (2019)
- [3]. 古川 康一, 植野 研, 尾崎 知伸, 神里 志穂子, 川本 竜史, 渋谷 恒司, 白鳥 成彦, 諏訪 正樹, 曾我 真人, 瀧 寛和, 藤波 努, 堀 聡, 本村 陽一, 森田 想平 : 身体知研究の潮流 --身体知の解明に向けて--, 人工知能学会論文誌, vol. 20, No. 2, p. 117-28, (2005)
- [4]. 諏訪 正樹 : からだメタ認知 : ことばと身体の共創としての身体知学習のメソッド, 人工知能学会全国大会論文集, 2N5-OS-16b-1, p. 1-4, (2015)
- [5]. 佐藤 航, 高林 佳奈子, 山本 葵, 加藤 晶太, 西村 拓一 : 地域連携研究サークルによる身体知の発見と共有, 人工知能学会第二種研究会資料, vol. 2022, No. CCI-009, p. 3-6, (2022)
- [6]. 総務省:平成 27 年版 情報通信白書 | 人口流出の背景.
<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h27/html/nc231120.html>, (参照 2023-10-06).
- [7]. 総務省 : 令和 4 年版 情報通信白書 | データ集 (第 3 章第 8 節) .
<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r04/html/nf308000.html#d0308140>, (参照 2023-10-06).
- [8]. 能美市 : JAIST 学生が能美の魅力を広く発信 ! .
<https://www.city.nomi.ishikawa.jp/www/contents/1631169684681/index.html>, (参照 2023-9-30).